

# 日本の近代化と旧中間層をめぐる一考察

——『米澤弘安日記』研究のために

青木 秀男

## 序 近代への関心

筆者は、これまで近代と民衆に関わる3つの主題を追ってきた。一つ、「近代と部落問題」である。現代の部落問題は、封建遺制なのか近代の所産なのか。筆者は、近代(明治期以降)における部落問題の再構築の諸相について考察してきた(青木2010a)。二つ、「近代と日本兵士」である。日本の近代は、どのようにファシズムを生み出したのか。筆者は、日本近代に象られた兵士の「精神構造」<sup>1)</sup>(丸山1951: 67)について考察してきた(青木2008)。三つ、「近代と職人」である。近代は、民衆をどのように翻弄したのか。筆者は、都市旧中間層(以下旧中間層)に属する職人の近代への適応過程について考察してきた(青木2006; 2010b)。これらの主題に通底する問題意識は、「近代と民衆」であった。すなわち、近代とはなにか。民衆における、民衆にとっての近代は、どうであったか。

日本の民衆と近代に関わって、本稿は2つの課題を設定する。一つ、「日本の近代」について考察する。日本の近代はどこから来たのか。それは、日本に自生したものか、それとも外から移入されたのか。ここでは、日本近代をめぐる先行研究を整理し、その由来の理解をめぐる方法的課題を提示する。二つ、「近代と民衆」について考察する。民衆は近代にどのように適応したのか。近代の由来はどうであれ、近代は一つの時代として、日本で創造され、社会に埋め込まれた。開明的な権力者が、近代を誘い、それに似せて(上から)時代と社会を創造した。知と権力を持たない民衆が、新たな時代と社会への適応を迫られた。そして近代への適応は、民衆の間でも多様であった。ここでは、金沢で明治・大正・昭和を生きた象嵌細工職人が書いた日記(『米澤弘安日記』<sup>2)</sup>)の研究を念頭に(本稿は、『米澤弘安日記』自体の研究ではない)、旧中間層における〈近代的民衆〉の展開について考察する。

ここで〈民衆的近代〉とは、色川大吉の語に依る。「明治維新は、維新前から始まっていた民衆的近代への内発的な発展を大いに促した」(傍点は引用者)(色川1991: 138)。「民衆と近代」の主題に沿ってこの語を展開し、もって、

日本の近代化研究、民衆研究の鍵概念に育てたい。これが本稿の意図である。まず、民衆とはだれなのか。ここで民衆を、国家や社会を構成し、その中で統治・統制される側にある人々の総体とする。その限りで、民衆は、共通の利害をもち、共通の社会的地位にある人々である。民衆は、それ自身、(新・旧の)中間層から底辺層に及ぶ厚い階層構造をなす。そしてその中で、たがいに包摂し、排除しあう分断の関係にある。豊かな民衆もいれば、貧しい民衆もいる。統治権力に寄り添う民衆もいれば、反抗する民衆もいる。「民衆の中には対立もあれば争いもあれば、裏切りもあれば差別もある、抑圧する者も抑圧される者もいる」(色川1991: 12)。本稿は、民衆を、被統治の側<sup>い</sup>にありながら、たがいに階層をなす人々として捉える。そしてその中の、(居職<sup>じよく</sup><sup>3)</sup>の象嵌細工職人が属する)旧中間層に焦点を当て、その近代(化)への適応様式について考察する。

## 1 近代の理解

### 1) 本稿の近代観

次に、近代とはなにか。ウェーバーは、近代を、「自由で自律的な主体」、すなわち、「目的合理性を考慮し、合理的(理性的)に判断する能力をもち、一定の価値基準を精神の中心に据え、そしてその基準に準拠しつつ、恒常的に一貫した振舞を成しうる」(橋本2000: 126)人間が現れた時代とした。それは、日本ではどうだったのか。その問題に進む前に、近代の理解をめぐる、たがいに繋がる、留意すべき2つの事柄がある。一つ、大塚久雄らは、ウェーバーの近代的人間像を鏡として、日本における近代的自我の未成熟を説いた。丸山は、近代的自我の未成熟が、日本のファシズムを生んだとした。「日本のナショナリズムの精神構造において、国家は自我がその中に埋没しているような第一次のグループ(家族や部落)の直接的延長として表象される傾向が強く、祖国愛はすぐれて環境愛としての郷土愛として発現するということである」(丸括弧と傍点は原文)(丸山1951: 67)。このような近代理解においては、日本近代に前近代の残滓、すなわち「封建遺制」をみる講座派マルクス主義の人々も同じであった。そしてそこでは、前近代・封建制が近代化の阻害要因とされた結果、近代自体に胎まれる問題が問われることはなかった。「『近代』主義は、そもそも『近代』そのものを問い、告発する視角をもたない」(子安2003: 244-245)。これに対してウェーバーは、近代人の精神構造の結末には悲観的であった。近代は、人間の精神を幽閉する「鉄の檻」になり、近代人は、「一種の異常な尊大さで粉飾された機械的化石」の「精神のない専門人、心情のない享楽人」(Weber, 1920=91: 366)になる、人間

は、その宿命を避けることができない、と考えた。その意味で、ウェーバーは、近代を対象化し、その「意図せざる結果」を洞察する視点をもっていた。後年、マックス・ホルクハイマー (Max Horkheimer) とテオドール・アドルノ (Theodor Adorno) は、近代を批判し、「何故に、人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代りに、一種の新しい野蛮状態に落ち込んでいくのか」(Horkheimer und Adorno, 1947=90: ix) と問うた。そして、ドイツの近代的理性こそがナチズムの母であるとした。彼らは、近代自体に、合理的理性が非合理的な道具的理性に転じる必然性をみた。本稿は、このような近代批判の視点を共有する。

二つ、日本近代の民衆は、おおむね、伝統的で集団主義的な生活世界に沈潜しながら、生きてきた。丸山は、日本のファシズム・イデオロギーの特徴として「家族主義的傾向」を挙げた。「家族主義というものがとくに国家構成の原理として高唱されているということ。日本の国家構造の根本的特質が常に家族の延長体として、すなわち具体的には家長としての、国民の『総本家』としての皇室とその『赤子』によつて構成された家族国家として表象されること」(丸山1948: 273)。ここで集団主義とは、このような家族主義を中核とする、日本人の全般的な集団志向の生活態度を指す。本稿は、その実際の様態を、旧中間層の民衆を事例に、そのイデオロギーと精神構造を描写する。ただし、伝統的な集団主義とは、日本人の近代的自我が未成熟であったことを意味しない。それは、日本の前近代のたんなる残滓ではない。それは、起源を前近代・封建制に発しながら、近代に再構築されて日本社会の統合に積極的に機能してきた原理 (の一つ) である。「近代性一般というようなものは存在しない。複数の国民国家があり、それぞれの国民国家が、それぞれ独自のやり方で近代的社会に変化するものである」(ジェフリー・ハーフ Jeffrey Harf) (子安2003: 219)。普遍的な歴史過程 (近代化) は、個別 (日本) の歴史的 (前近代的) 条件を介し、またそれを再構築しつつ、みずからを実現する。こうして一方で、近代的な合理主義が浸透し、他方で、「伝統的な」集団主義が再構築される。近代と「伝統」は、断絶ではなく連続している。そして近代は、「伝統」と葛藤しあい、絡みあってみずからを創造する。近代とは、そのような矛盾と捩れを内包する漸次的な歴史過程を指す。これが、本稿のもう一つの近代理解である。本稿でいう伝統は、すべて、再構築された「伝統」のことを指す。

## 2) 2つの問題系

本稿の主題は、2つの問題系からなる。一つ、(日本の) 近代 (化) の理解を

めぐる問題系である。(先行研究によれば)近代の中核に、資本主義の〈精神〉がある。資本主義の〈精神〉の中核に、労働のエートスがある。労働のエートスの中核に、〈勤勉〉〈質素〉などの倫理がある。では、日本の近代民衆は、どのように勤勉で、質素であったのか。彼らは、どのような労働のエートスをもったのか。それは、どのように日本資本主義の〈精神〉へと結晶したのか。これらの問題群である。二つ、都市の旧中間層の理解をめぐる問題系である。職人は、都市民衆の一部であった。また、旧中間層の一部であった。では、都市旧中間層とは、どのような人々であったのか。彼らは、どのような経済状態にあったのか。彼らは、地域において、どのような役割を担ったのか。国家に対して、どのような立場を取ったのか。これらの問題群である。次節では、まず、これらの問題群をめぐる中心概念について最小限度に必要な考察を行う。次に、その上で、本稿の主題〈民衆的近代の研究〉の位置取りを行う。そして、本稿が抱く問題意識と仮説(的構想)を提示する。

## 2 日本資本主義の〈精神〉

日本資本主義の〈精神〉の研究は、ウェーバー主義者やマルクス主義者の研究が交錯し、たがいに繋がりあう、2つ論点をめぐって行われてきた。まず、日本の近代化は「未成熟」だったとなし、その原因をめぐる議論である。その問いはこうなる。いかなる文化的・構造的要因が、日本の近代化を阻んだのか。次に、日本資本主義の〈精神〉をめぐる議論である。その問いはこうなる。日本には資本主義の〈精神〉はあったのか。あったとして、それはいかなるものだったのか。これらの論点は、具体的に、以下のような議論として展開されてきた。

### 1) 〈精神〉の「欠如論」

まず、日本には資本主義の〈精神〉を生じる歴史的条件がなかったという「欠如論」についてである。それは、さらに2つの主張からなった。一つ、日本には西欧資本主義の流入に抵抗する宗教的・思想的主体がなく、そのことが、日本資本主義の形成に結果したという主張である。日本は、アジア諸国に先んじて(近代)資本主義の道を歩んだ。ウェーバーは、「宗教と社会」の観点から、「西欧の近代化」と「非西欧の非近代化」について論じたが、その彼も、この事実に着目した。そして次のように書いた(Weber, 1921a=71, Chap.6; 1921b=83, Part 3, Chap.4)。日本の神道も儒教も、超越的な神と、来世で人間を救済するという思想をもたなかった。仏教は救済思想をもったが、その仏も、人間を支配する存在(「神の道具」)ではなく、人間が近づく

ことのできる存在（「神の器」）であった。ゆえに、救済思想が、人間に脅迫的に世俗内禁欲を強いることはなかった。また、日本の宗教は、呪術的・救拯論的な救世者の威信を備えた階層をもたなかった。ゆえに日本には、資本主義の到来に強力に抵抗する階層がなかった。その結果、「日本は資本主義の精神をみずから作り出すことが出来なかったとしても、比較的容易に資本主義を外からの完成品として受け取ることが出来た」（Weber, 1921a= 83: 377）。丸山も、これと同じ論理を展開した。「絶対者がなく独自の仕方世界を論理的規範的に整除する『道』が形成されなかったからこそ、それ（神道～引用者）は外来イデオロギーの感染に対して無装備だった」（丸山1957: 207）。丸山は、日本の伝統思想は、「諸々の新しい思想を内面から整序し、あるいは異質的な思想と断乎として対決するような原理として機能しなかった」（丸山1957: 198）とし、その無構造的な継承のあり方を指摘した。また小笠原真は、日本の宗教は、時代や権力を超克する力と影響力をもつことはなかった、それは、たとえば仏教が、「維新政府の『神仏判然』令と廃仏毀釈運動にみるべき抵抗ができなかった」（小笠原1994: 76-77）ことに示されることとした。

次に、ウェーバーによる日本近代化の理解に準拠し、日本では西欧のような資本主義の〈精神〉が未成熟だったとして、日本の歴史的条件的消極的な側面を強調する主張である。そして、資本主義の〈精神〉の未成熟の原因、すなわち、日本社会の前近代性・（半）封建性が分析され、近代の成熟・封建性の克服の条件が模索された。これが、日本近代化の研究の中心をなすとみていい。川島武宜は、日本の家制度にみる家父長制とそれを支える、儒教道徳に発する「家族制度イデオロギー」について分析した（川島1957）。神島二郎は、伝統的な自然村（ムラ）の秩序原理が拡大再生産されてできた擬似自然村〈第二のムラ〉について分析した（神島1961）。丸山は、「抑圧の委譲」（丸山1946: 32）や「無責任の体系」（丸山1949: 140）として表出する、近代的自我が埋没した知的支配層の精神構造について分析した。そして彼らは、家族制度イデオロギー、第二のムラ、没我的な精神構造が、日本人の「自由で自律的な」自我の形成を妨げ、日本資本主義の自由な発展の桎梏となって、それでも急速に膨張する資本主義が生み出す社会矛盾を、家族主義的な国家的秩序に解消していくメカニズムを明らかにした。

また、日本資本主義の形成を促す宗教的・精神的な条件の存否は、その経済的・階層的な基盤の存否に照応する。ウェーバーは、自律的な資本主義の経済発展が日本で発展しなかった理由に、日本の宗教の特徴を挙げると同時に、日本の封建制が、外国との政治的・経済的な交流を遮断する鎖国政策を

取ったこと、市民階級を形成する自由都市が、堺などの一部の都市を除いて形成されなかったことを挙げた(Schwentker,1998=2013: 34)。日本には、封建制およびその残滓「封建遺制」の経済的・階層的基盤をめぐる数々の研究がある。たとえば(野呂榮太郎・服部之総・羽仁五郎・平野義太郎・山田盛太郎他1932-33)。しかし、これらの研究の検討については、別稿に譲る。ここで1点だけ言及するなら、日本資本主義の形成を促した経済的基盤の分析についても、先に記した本稿の近代(化)理解が妥当する。封建遺制は、近代社会において再構築され、新たな機能を課せられた「遺制」である。

## 2) 〈精神〉の「特殊論」

次に、日本にも資本主義の〈精神〉を育む宗教や思想があったとして、西欧の近代資本主義の〈神〉の「機能的な等価物」を求める、日本資本主義の「特殊論」である。これは、ウェーバーの日本近代化論と途中から袂を分かち方向である。ウェーバーと同じ問題関心から出発しながら、ウェーバーとは反対の方向で問題の答えが見出される。それは、ウェーバーの「非西欧世界の非近代化」仮説に挑み、反証するものである。それは、さらに2つの方向を取った。一つ、日本の諸宗教にプロテスタンティズムの職業倫理の機能的な等価物を見出す方向である。そこでは、神道や仏教、儒教、幕末の新興宗教の倫理徳目(勤勉、質素など)が、人々を禁欲的に労働に駆って、日本の近代化の動因となったと主張された。例えば、神島は神道に(神島1961)、内藤莞爾や黒崎征佑は浄土真宗に(内藤1941)(黒崎2005)、中村元や山本七平は禅宗に(中村1965)(山本1979)、戸谷敏之は儒教に(戸谷1948)、安丸良夫は近世末期の新興宗教(黒住教、金光教、天理教、丸山教)に(安丸1974)、そしてロバート・N・ベラー(Robert N. Bellah)は徳川時代の宗教に、ひたすら質素に努め、営利活動に励む資本主義の〈精神〉に適合的なエートスをみた(Bellah,1957)。禅宗については、とくに江戸初期に生きた鈴木正三しゅうざんの「職業は即仏行なり」、すなわち、人間は労働によって仏に救済されるとする『万民徳用』の思想が注目された(鈴木1962: 68-71)。新興宗教については、安丸の、民衆を労働へ駆るエートスを内在的に分析した「通俗道徳」論が注目された。こうして、それらの研究において、次のように主張された。日本の諸宗教の生活倫理が精神的動因となって、人々が営利活動に励んだ。その結果、商品経済が発展し、富が蓄積することとなった。江戸時代末期には、「資本主義的な経済システムを形成する構造的な前提はすでに出来ていた」(Schwentker, 1998=2013: 44)。

二つ、日本の〈家〉の制度とイデオロギーに、プロテスタンティズムの

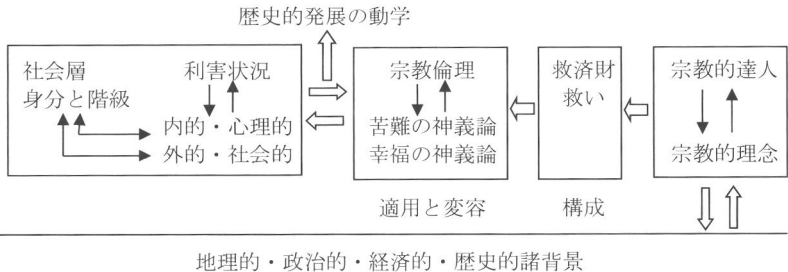
職業倫理の「機能的な等価物」をみる方向である。そこでは、家業は〈家〉とともにあること、一子相続により家産の分散を防ぎ、それが資本として機能したこと、有能であれば非血縁者であっても〈家〉の継承者にしたこと、経営と家計を分離したことなど、日本の〈家〉本来の経営合理性が指摘され、〈家〉と資本主義との親和性が強調された(村上・公文・佐藤1979)(三戸1994)(平山1995)<sup>4)</sup>。また、これとは別途に、速水融は、労働集約的な日本農業が、農民の「勤勉革命」を生み、それが日本の近代化を導いた、日本の近代化は、宗教でなくとも説明が可能であると主張した(速水1979: 10-13)。

### 3) 批判と方法

日本資本主義の〈精神〉の「欠如論」「特殊論」のいずれも、批判に晒されてきた。たとえば小笠原は、日本の宗教に資本主義への動因を求める諸説を批判して、日本では、宗教はつねに政治権力に屈服してきた、ゆえに、宗教は世俗世界を支配する力をもたず、日本の近代化に決定的な役割を演じることはなかったと主張した(小笠原1994: 82-83)。ヴォルフガング・シュヴェントカー(Wolfgang Schwentker)は、内藤による浄土真宗と近江商人の経済倫理の適合性論を批判して、近江地方の事例をどこまで日本全体に一般化できるのか疑問があると主張した(Schwentker,1998=2013: 334)。山崎正和は、〈家〉の制度とイデオロギーに資本主義への動因を求める研究を批判して、近世農村の単婚小家族や都市の小商人家族には、〈家〉の観念もシステムもなかった、ゆえに、社会構成原理としての〈家〉論は、日本社会の半分に妥当するにすぎないと主張した(山崎1990: 76)。とはいえ、これらの「欠如論」「特殊論」のいずれにも、説得的な部分と、そうでない部分がある。それらは、それぞれのやり方で、日本を資本主義へ駆る誘因を説明しており、その限りで、それらの主張は説得的である。逆に、「欠如論」「特殊論」に対する批判も、それぞれ説得的である。ここでの問題の根源は、日本の近代化を、なにか単一の要因によって説明することの無理にある。日本の近代化は、複数の要因の関係性・セットにより説明されなければならない。そのためには、それらの要因相互の因果連関を説明する枠組みが用意されなければならない。たとえば富永健一は、タルコット・パーソンズ(Talcott Parsons)のA(目標adaptation)、G(目標達成goal attainment)、I(統合integration)、L(潜在的パターンの維持latency)図式を援用して、日本近代化論を展開した(富永1990: 31-32)。そこでは、4つの要因を分離したうえで繋ぎ合わせる、日本近代化の機能主義的な説明が行われた。シュヴェントカーは、「日本社会

における近代的・合理的な要素と伝統的・非合理的な要素」の共存を指摘し、日本の近代化は、「ある一つの社会において非常に近代的でない構造と平行して比較的近代的な社会形態の制度化へと至る社会変動のプロセス」、すなわち「部分的近代化の特殊なケース」であるとした (Schwentker,1998=2013: 353)。ここで、このような機能主義的で部分集積的な近代化認識の批判には踏み込まない。ともあれ、日本近代化の分析枠組みを構成するためには、日本の近代化研究の全体を視野に、要因相互の因果連関を具体的に特定し、それを一つひとつ積み上げて、因果連関の全体像(部分の集積ではなく)を把握しなければならない。図1-1を見られたい。それは、ウェーバー研究者の内田芳明による宗教と社会の観点からする、歴史の動学(近代化への途)を生じる諸要因の因果連関を説明する枠組み(の一つ)である(内田1968: 222 一部変更している)。その枠組みは、日本の近代化の分析へどのように具体化されるのか。すなわち、日本の宗教・経済・社会(慣習・規範)は、たがいに関連しあって、近代化をどのように阻み、どのように促進したのか。次に、民衆精神の近代化の分析へどのように具体化されるのか。すなわち、日本の近代化は、民衆の次元でどのような精神構造を培い、どのように民衆を近代化へ適応させたのか。内田の枠組みは、これらの問いに答え、日本民衆の近代化を統一的に分析・解釈・説明する枠組みとして再構築されなければならない。

図 1-1 宗教と社会と歴史の動学



ところで、日本資本主義の〈精神〉の「欠如論」と「特殊論」を典型的に対照させうえて、双方を超えることの必要を主張した研究がある。中村則弘は、地域経済の内発的発展論の立場から、日本における資本主義の〈精神〉の未成熟を説く「欠如論」を「西欧的オリエンタリズム」(中村2005: 8)と呼び、日本の宗教にプロテスタンティズムの倫理の「機能的な等価物」を求める「特殊論」を「日本的オリエンタリズム」(中村2005: 16)と呼んだ。そして、こ



れら2つの方向を「脱オリエンタリズム」の方向で克服すべきであると主張した(中村2005: 16-17)。折原浩は、ウェーバーの方法的類型論に則って、「欠如論」を、西洋近代文化に対して「過同調」する「西欧派」(折原2005: 203-204)と呼び、「特殊論」を、日本資本主義の〈精神〉の特殊性を強調する「自文化中心主義」の「国粹派」(折原2005: 203-204)と呼んだ。そして、それらの対立を、ヴェーバーの「巨視的比較宗教社会学」の類型論的な方法で克服しなければならないと主張した(折原2005: 208)。

「欠如論」と「特殊論」の対立を克服するには、たんにそれらを対照させるに止まらず、日本資本主義の〈精神〉類型の積極的な構成に至らなければならない。『『西洋文化圏』(とくに「西洋近代」)と『日本』(とくに『幕末このかたの日本』)とを、ひとまず相異なる『文化類型』として措定し、比較によって双方の異同を問い、相互に特質づける』(折原2005: 203-204)。しかし、その類型の構成は容易な仕事ではない。たとえば、レヴィ＝ストロース(Levi-Strauss)は、西欧と日本の労働のエートスを比較して、次のように主張した。ユダヤ・キリスト教(カソリシズム)においては、人間は神との接触を断たれており、労働は、神により課せられた罪である(Levi-Strauss, 1978: 87)。これに対して、日本では、人間(彼の場合、伝統工芸に携わる職人や伝統的な芸能者が想定された)において、「聖なる感情、宗教的感情を保持しており、労働を通じて神との接触が成り立ち、維持されて」(Levi-Strauss, 1978: 97)いる。そこでは、労働と余暇の間に断絶がなく、仕事自体が生き甲斐となっている。レヴィ＝ストロースは、このように主張した。類似の議論は、日本の職人論にもみられる。「職人的労働の世界は、職場の自主管理の世界でもあった。商品のデザイン、設計、作業(生産)計画等についての決定権は職人自身がこれを握り、作業(職人)は、自己の仕事の出来栄によってその仲間と腕を競いあうことができた。彼等には、仕事上守るべき一定の職業倫理があったことはいうまでもない。したがってこの世界には、労働の辛さとともに喜びもあった」(尾高1993: 273)。そして、このような職人のエートスは、近代工場の職工に受け継がれた。職工は、西欧伝来の工業技術を継承し、日本資本主義の発展の礎を形成した(遠藤1985: 41)。ところで、このような、レヴィ・ストロースや尾高、遠藤が描く労働のエートスは、はたして(中世または近代の)西欧の職人精神にはなかったのだろうか。西欧中世の職人を論じた先行研究からは、そのような疑念が生じる(阿部1978: 1981)。彼らは、その疑念に答えていない。西欧の職人も、類似の労働のエートスをもっていた。では、そのエートスのどこまでが日本のものなのか。それを確定するには、別途の実証が必要になる。そしてそこ

でも、複数の説明要因からなる枠組みが用意されなければならない。

日本資本主義の〈精神〉の類型を比較しつつ構成するには、3つの手続きを踏まなければならない。一つ、西欧の資本主義の〈精神〉と日本のそれとの類似性と差異性を特定すること。また、前者が後者に与えたインパクトを特定すること。二つ、それらの類似点と差異点が、西欧の資本主義の〈精神〉と日本のそれの全体において占める位置、すなわち、全体のなかでもつ意味を特定すること。三つ、西欧の資本主義の〈精神〉と日本のそれのそれぞれを構成する中心的な諸要因を抽出し、それらの間の因果連関を特定すること。このような手続きを経て、類型が構成される。類型とは、資本主義の〈精神〉をなす主要な要因を中心に構成された、諸要因の関係の型をいう。その関係の型の中に、日本資本主義の〈精神〉の純化された個性を見出すことができる。いずれの検証と確定の手続きも、大仕事である<sup>5)</sup>。

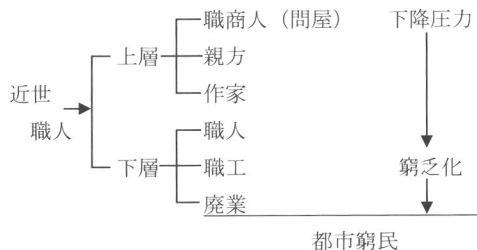
『米澤日記』研究は、このような、日本資本主義の〈精神〉とその類型構成の方法に留意しつつ、一方で、本稿の主題がそれらにどのように架橋されるかを展望しつつ、他方で、日本近代化の促進／阻害要因とその過程を明らかにするという課題を抱き、「近代」「日本」の「民衆」「職人」の労働と生活のエートスを、一人の職人を事例として分析する。本稿は、その道程に向けた予備考察としてある。

### 3 都市旧中間層

#### 1) 職人の階層

幕藩期に身分的な特権をもった都市の上級職人（藩の御用職人）は、明治期に入り、藩の庇護と顧客（武士）を失い、資本主義の競争市場に放り出された。彼らは、「明治中期以後はその大量の存在、過度の競争、生産力の停滞、巨大資本による苛酷な利用と収奪のうちに高い開廃率を示しながら」（寿里1962: 79）辛うじて生き延びた。その過程で、職人は、劇的な階層分化と再編成を被った（隅谷1955：37-41）。図1-2をみられたい。

図 1-2 近世職人の階層分化



旧職人の多くは、生活の基盤を失い、転職と廃業をよぎなくされた。ある者は、(問屋制)家内工業や(マニファクチュア制)手工場の職工(artisan)<sup>6)</sup>になった。ある者は、機械制工場の職工(熟練労働者)(worker)になった。旧職人の一部は、生活用具や奢侈品を製作する工芸職人(craftsman)になった。洋服の仕立て職人や靴職人など、時代の需要に応じる新たな職人も現れた。これらの職人は、職商人(craft-trader)や問屋の注文を受けて生活用具を製作した。技術や資金がある者は、美術工芸品を制作する作家(artist)になった。「(展覧会)の入選回数の多い職人は『作家』と呼称され、定着するとかつての職人仲間を蔑視し、職人でないことを誇った」(田中1992a: 112)。また、親方や職商人になる者もいた。反対に、ある者は、すべての機会を失って窮民の列に加わった。これらの階層の間には、さまざまな中間層がいた。近代的工場には職人的職工がいた。親方の元で働く職人には、賃稼ぎ人や窮民に近い者がいた。工芸作家の多くは、生活用具の修繕や製作を行う職人であった。弘安がその一人であった。このような階層分化は、明治期に旧藩の庇護と顧客を一挙に失った旧武具職人の場合、いっそう劇的であった<sup>7)</sup>。職人に留まることができた者は、ごく一部であった。作家になれた者は、さらに少数であった。「職人が賃銀や手間賃をえる位置から、大げさにいえば美を創造する作家としてその創造に見合う代価が作品に支払われる位置に進むためには、資産があるか、パトロンをえるか、もしくは家族から別途の収入があるかに関わっていた。いかにすぐれた素質があろうとも、職人から作家への道はほとんど閉ざされていたとってよかった」(田中1992a: 82)。

旧中間層とは、(多くの場合)資本主義の成立以前から存在する伝統的な生産基盤のうえで、形式的には独立していながら、零細な資本を元手に仕事を行い、実質的には問屋や企業に従属した人々をいう<sup>8)</sup>。丸山は、(戦前の)旧中間層を、「小工場主、町工場の親方、土建請負業者、小売商店の店主、大工棟梁、小地主、乃至自作農上層、学校教員、殊に小学校・青年学校の教員、村役場の吏員・役員、その他1般の下級官吏、僧侶、神官、というような社会層」(丸山1948: 296-297)とした。このうち、都市に仕事の基盤を置く人々が、都市旧中間層である。職人でいえば、自営業主の人々、すなわち、上記の職人や作家、親方、職商人が、都市旧中間層に入る。彼らは、さらに階層化される。その下層には、破産寸前の人々がいる。破産すれば、雇用者になるしかない。それが叶わなければ、窮民になるしかない。上層には、潤沢な資本と仕事の基盤をもって、企業家(資本家)に迫る人々がいる。「旧中間層にも相当の内部の階層(たとえば企業規模による)の分化が認められ、心的構造にも共通な部分も認められるが、むしろその経済的安定・不安定に

よる異質化傾向に注目すべきだ」(寿里、1962、84)。都市旧中間層は、全体として、仕事の基盤が脆弱で、問屋や企業に従属し、つねに破産の危機にある不安定階層であった。

## (2) 状況牽引型

都市旧中間層は、「『経営者』の名と乖離した～引用者) 鬼火のような独立自営というイメージにしがみつき、矛盾した意識溝造をもつ」(寿里1962: 74) 人々であった。彼らは、「経済的不安乃至窮乏、地位低下に対する不満」や「危機階層意識」(寿里1962: 75) を抱いた。そこには、経済環境を生き抜く必死の生活戦略があった。彼らにとって〈勤勉〉は、不可欠の倫理徳目であった。彼らは仕事に励んだ。技術に対しては革新的であった。「市場の動きに敏感に対応し、技術革新の成果をいち早く取り入れるなど、さまざまな経営努力を行った」(鄭2000: 81)。他方で、彼らは「和」の人であった。生き残るためには、仕事関係や近隣の人々と和し、生産と販売を確実なものにしなければならなかった。また、都市旧中間層の仕事は、(たいていは) 家業経営としてあった。ゆえに、家族の労働力は不可欠であった。経営の責任者は、家長であった。家長と家族には、家父長的な支配関係があった。「その生活実態は安易どころか超人的労働と消費節約がなければ維持されず、努力と報酬という素朴な刻苦勉強主義、服従と保護という家父長的労使関係という生活倫理に支えられていた」(寿里1962: 12)<sup>9)</sup>。

このような階級的基盤にあった都市旧中間層は、さらに2つのグループに区分される。一つ、旧中間層の上層にあって、一方で、地域において行政の施策を代行し、他方で、地域の利害を行政に突きつける、地域のエリートの指導層である。二つ、その指導層のもとで、一方で、行政の施策を地域住民とともに受容し、他方で、地域の調和のために奔走する、地域の大衆的指導層である。これらのグループに、人間類型として構成される、対称的な社会的性格が照応する。まず、旧中間層の上層の一部に典型的な社会的性格である。それは、先行研究で描かれてきた旧中間層の人間像に、ほぼ照応する。その人間類型を、本稿では〈状況牽引型〉と呼ぶ。〈状況牽引型〉とは、状況が胎む矛盾や危機を積極的に乗り越えようとする人々を指す。すなわち、それは、不安定な階級的基盤にあって危機意識を募らせ、みずからがある生活状況に対抗し、危機を打破しようとする人間類型である。換言すれば、それは、状況と「闘う」人々である。その人々の精神には、3つの特徴が刻まれた。一つ、経済的境遇に対する大きな不安と不満である。その不安と不満は、大資本や官僚に対する旺盛な批判意識を生んだ。二つ、階級的地位の

固守に対する強い使命感である。彼らは、必死の努力により、ようやく自営業の地位に留まることができた。そのような生活条件は、保守的な秩序意識を生んだ。三つ、地位の動揺と喪失に対する焦燥感である。それは、彼らを脅迫的な行動に駆り立てた。そして、地域の活動的な政治的主体となった。

この人々は、地域(近隣)の活動に熱心な人々であった(鄭2002: 42)。彼らは、昼も夜も地域にいて仕事をした。地域の住民は、仕事の顧客であった。地域の消長は、彼らの運命を決した。ゆえに彼らは、地域の出来事に旺盛な関心を抱いた。彼らは、地域を組織し、統制し、指導する「擬似インテリゲンチャ、乃至は亜インテリゲンチャ」(丸山1948: 297)であった。「彼ら自身ではいつぱしインテリをつもりでいること、断片的ではあるが、耳学問などによつて地方の物知りであり、とくに、政治社会経済百般のことについて一応オピニオンを持つている」(丸山1948: 297)。そして、「地域に根ざした利益団体を基盤としてみずからの職業利益を追求しながら同時に地域活動」(鄭2002: 40)を担った。彼らは、進んで町内会長や方面委員になった<sup>10)</sup>。そのような地位と役割は、その危機意識と結びついて、保守的な大衆運動を生んだ。彼らは、資本の横暴と官僚の腐敗を糾弾した。そして、国家の危急を激しく訴える政治家の運動の共鳴盤となった。丸山らは、そのような都市旧中間層を、戦前期「ファシズムの社会的担い手」(丸山1948:296)とみなした。「その不満の吐け口は官僚的支配の末端機構に加わることによって社会的地位の上昇を計るか、あるいは危機における急進的ファシズムに参加するかの方向をとり、一方、下層大衆の組織化への圧迫者となる。ここでもまた旧中間層は、被害者であり加害者で」(寿里1961:69-70)あった。

こうして、この人々は、激しい危機意識を抱き、みずからの階級状況に積極的に対応し、状況の打破に向けて近隣住民を牽引する人間類型であった。それは、変動する政治状況の草の根にあり、行政機構の末端にあつて、地域の政治を牽引する少数のリーダー層の社会的性格としてあった。このような〈状況牽引型〉の中心的な精神的項目は、〈批判〉と〈変革〉であった。

### (3) 状況順応型

次に、旧中間層の中・下層に典型的な社会的性格である。それは、先行研究においてほとんど描かれてこなかった旧中間層像である。その社会的性格をもつ人間類型を、本稿では〈状況順応型〉と呼ぶ。〈状況順応型〉とは、状況が胎む矛盾や危機に耐え、知恵と創意をもってそれらを凌ぐまたはやり過ぐす人々を指す。それは、不安定な階級の基盤にあつて危機意識を抱くものの、それを行動的に打破するというより、みずからがある生活状況に適

応し、危機に忍従し、危機をやり過ごそうとする、受動的な人間類型である。換言すれば、それは、状況と「闘わない」人々である。その人々の精神には、次のような3つの特徴が刻まれた。一つ、経済的境遇に対する大きな不安と不満である。その不安と不満は、大資本や官僚に対する批判意識を生んだ。しかし、その批判意識は抑制的であり、関心の中心は、危機をどう凌ぐかということにあった。二つ、階級的地位の固守に対する使命感である。彼らは、必死の努力により、ようやく自営業の地位に留まることができた。しかし、そのような生活条件が、過度に保守的な秩序意識を生むことはなかった。すなわち、生活状況に調和的な域を越え出すことはなかった。三つ、地位の動揺と喪失に対する焦燥感である。しかし、それが彼らを脅迫的な行動に駆り立てることはなかった。それより、所与の生活条件の中で、創意と工夫により状況を馴致することに専念した。こうして、彼らのイデオロギーは保守的で、その行動は、地域の和を基本とし、行政の思惑に従順で、先導的な政治的主体に追随するものに留まった。

この人々は、地域（近隣）の活動に熱心な住民であった。彼らも、〈状況牽引型〉の人々と同様、地域の出来事に関心を抱き、地域を熟知して、近隣住民に知識を授ける「擬似インテリゲンチヤ」であった。しかし彼らが、みずから町内会長や方面委員を買って出ることにはなかった。しかし、町内会長や方面委員を依頼されると、彼らは、その役割に専心し、仕事をしっかりこなした。そのような社会的性格は、その危機意識と結びついて、保守的な大衆運動の後衛たる賛同者になった。彼らは、資本の横暴と官僚の腐敗に批判的であった。しかし彼らは、国家の危急を激しく訴える政治家の運動の傍観者のような共鳴者になるに留まった。彼らは、丸山らのいう「ファシズムの社会的担い手」の、その追随者であった。このような〈状況順応型〉の中心的な精神的項目は、〈責任〉と〈調和〉であった。それは、都市旧中間層の多数を占める人々のものであった。彼らは、不安定な存在基盤を勤勉と労働により支えた。激しい状況の変化は、彼らの存在基盤を崩壊の危機に曝した。ゆえに彼らは、いかなるかたちであれ、大きな変化に警戒的で、防衛的で、すべにある秩序を固守することに専した。地域での活躍も、地域の平安を保ちたいという一念から生じたものであった。

#### (4) 〈状況牽引型〉と〈状況順応型〉

ここで、留意すべきことがある。このような〈状況牽引型〉と〈状況順応型〉は、それぞれ、旧中間層の上層と下層の人々を主要な担い手とする2つの社会的性格を、彼らの態度類型として構成したものである。「闘う」と「闘わ

ない」は、そこから導かれる行為の型としてある。ゆえに、それらはいずれも、実際の旧中間層の人々を純粹かつ完全に区分するものではない。実際の人々は、〈状況牽引型〉と〈状況順応型〉のいずれに偏ろうと、それらの類型の中間にあった。〈状況牽引型〉の人々が、最初から、またつねに「闘う」人々だったわけではない。彼らは、置かれた境遇と生活の中で、徐々に、すなわち、状況の一步前に出ることに逡巡しながら、または、なにかの出来事をきっかけに、突然に〈状況牽引型〉になった人々である。また彼らは、行為においては、「闘う」／「闘わない」の間で揺れた人々である。そしてその態度と行為が、最後は、徐々にまたは激しく「闘って」状況を牽引する方向へ押し出されていった。これに対して、〈状況順応型〉の人々は、つねに状況に従順な「闘わない」人々だったわけではない。彼らは、みずからの仕事と生活を危機に陥れる経済や政治に対して憤っていた。そして、状況を変革することの必要を痛感していた。ゆえに彼らは、「闘う」／「闘わない」の間で揺れた。私的世界にあって、その憤りが、態度や言葉で表出することもあった。しかし、その態度と行為は、最後は、諦めて、または積極的に選択して、「闘わないで」状況に順応する方向へ回収されていった。さらに、ある人は、〈状況順応型〉から〈状況牽引型〉へ移行した。ある人は、その逆の過程を辿った。ある人は、2つの態度を往復した。状況牽引と状況順応の過程と様態は、無限に多様であった。このように、〈状況牽引型〉と〈状況順応型〉は、実際の人々が、態度と行為においてさまざまに揺れたという事実を認識したうえで、それらの社会的性格の中心部分を抽出して、類型として構成したものである。『米澤弘安日記』研究の意図は、このような分析手順に則って、類型としての〈状況順応型〉に焦点を当て、それを尺度に、弘安の生活史を分析し、かつそのことを通して、〈状況順応型〉の中身を描こうというものである。

#### 4 民衆弘安

本稿は、『米澤弘安日記』研究を行うものではなく、そのための2つの理論的課題（「日本の近代」「近代と民衆」）について考察した。弘安は、近代への適応を迫られた民衆の一人であり、旧中間層の一人であった。彼の仕事は家業であり、その基盤は不安定であった。そして、生活はしばしば困窮した。彼は、「人並みの」信仰心をもった<sup>11)</sup>。彼は、仕事熱心な人であった。彼は家長であり、家族の平安に責任を負った。彼は、地域の世話に奔走した。また、政治に旺盛な関心を抱いた。このような弘安像は、おおむね先行研究が描く旧中間層の像に符合する。しかし、まるごと重なるわけではない。弘安は、

家あって権威を誇示するタイプの家長ではなかった。律儀な弘安は、家督を兄弟に三等分した。仕事は不安定であったが、職商人や問屋に完全に従属することはなかった。彼は、息子に家業を継がせなかった。彼は、家業の将来を危惧して、その決断に躊躇しなかった。さらに弘安は、〈状況順応型〉の人であった。弘安は、地域の世話に奔走したが、指導者というより善意の世話人であった。弘安は、政治に関心をもったが、危機感に煽られることも、激しい政治活動を行なうこともなかった。

このような弘安の人間像は、先行研究が描く〈状況牽引型〉の都市旧中間層像と一部重なり、一部ずれている。問題は、そのズレである。弘安の人間像を描き、そのズレの意味を問うこと。これが分析の課題となる。それにより、旧中間層としての〈民衆の近代〉の差別的な姿、すなわち、〈状況牽引型〉の民衆像と対照される〈状況順応型〉のそれが浮かび上がる。そしてそこに、日本近代(化)を担った人々の多様な断面の一つをみる。というより、〈状況順応型〉こそ、日本近代(化)を担った民衆の主要な人間類型であったことをみる。

本稿は、「日本の近代」「近代と民衆」をめぐる不相応な野心を抱くものではない。それは、日本近代論の本流に注ぐ細い支流にすぎない。本流には、多くの支流が注ぎ込んでいる。たしかに初発の関心は、次のような問いにあった。(現代)日本の民衆は、どれほど権威主義的な集団主義を脱して、「自由で自律的な人間」たりえているのか。その集団主義は、「伝統的な」(前近代的な)秩序意識のどのような近代版としてあるのか。また、日本のどのような近代精神の具体的な顕現としてあるのか。『米澤弘安日記』研究は、それらの答えの手掛りを一人の職人の中に求める。

〈状況順応型〉の都市旧中間層の一人・弘安には、次のような〈民衆の近代〉像が重なる。民衆は、いつも時代の潮流や統治権力の恣意に驚き、右往左往し、最後はそれらを受容する客体としてあった。民衆にとって、明治以降の近代化は、そのような衝撃の連続であった。こうして民衆は、「上からの近代化」の受け皿となった。民衆にとって、近代化は、「把握された」外発的な強制力であった。とはいえ、時代や統治権力の方は、民衆を受容されることなくして、その意図を実現することはなかった。

民衆は、他方で、「上からの近代化」に驚き、躊躇し、開き直り、抗って、ついにはそれを自分の利害関心に合わせて修正していった。そして、そのような無数の民衆が集まり、時代の潮流や統治権力の意図を変更して、近代化の方向を転轍する主体にさえなった。そこでは民衆は、「下からの近代化」の推進者であった。それは、民衆が「把握した」近代化であり、民衆にとっ



て内発的な近代化であった。

歴史に把捉される民衆から、歴史を把捉する民衆へ。しかしその過程は、紆余曲折のものであった。民衆は、近代化を受容した。でなければ、民衆は、新たな時代を生きることではできなかった。しかし民衆は、「伝統的な」価値をしっかりと抱き、恐る恐る、慎重に近代的な価値を受容した。そして、それを徐々に生活の指針に取り込んでいった。古い衣を、一枚ずつ新しい衣に着替えていく。それが、民衆の近代化受容の過程であった。その用心深さこそ、民衆の生き抜き戦略 (survival strategy) の真髄であった。「民衆はみずからの生活の論理にしたがって、変化から自己をまもり、あるいは変化に自己を適応させ (両者はかさなりあうが)、そうしてそのなかでも自己をつらぬいて幸福を追求してゆこうとしたにちがいない」(鹿野1968: 51)。このような表現さえ、すっきりし過ぎている。民衆には、「自己をつらぬいて幸福を追求して」いくことは、容易なことではなかった。〈民衆の近代〉の精神は、いわば、二つのベクトルが交差する地点にあった。「一方のベクトルに歴史の発展法則があり、他方のベクトルに『人間の主体的営為』がある。歴史はその二つのベクトルの合力によって決まる」(大門2001: 5)。本稿に続く課題は、まず旧中間層弘安の精神構造、次いで非被差別部落民及び日本兵士の精神構造の内奥に分け入ることである。そして、そこから〈民衆の近代〉に上昇し、民衆が近代の鉄鎖を断ち切り、自らの運命の転軸手となる、その瞬間を予見することである。

#### [注]

- 1) 「精神構造」の語は丸山眞男に依る。それは、社会に共有され、人々に身体化された行動の指針と呼べるものであり、本稿では、それをマックス・ウェーバー (Max Weber) の「エートス」に等しいものと理解する。
- 2) 米澤弘安 (以下弘安) は、1906 (明治39) 年～72 (昭和47) 年の間に、400字詰原稿用紙で4,336枚に及ぶ日記を書いた。その大部分は、23歳～37歳 (の大正期) の、生活が充実した時期に書かれた。文は、カタカナとひらがな併用の半文語調で書かれた。中身は、月日、曜日、天候、気温、本文の順で、本文は天候に続き、日々の出来事 (家族や周辺の人々の行動、結婚・葬儀・仕事・旅行等)、政治・社会の出来事 (政治・軍事・皇族の動向。新聞記事の抜粋として) が書かれた。『米澤弘安日記』は、米澤日記編纂委員会 (金沢市教育委員会) の委嘱を受け、筆者ら (元都市社会学研究所) が原本の解説、コンピューター入力、編集を行って、2000～03年に4冊本で復刻出版された。
- 3) 居職とは、自宅で仕事をする職業、またその人をいう。その対語は出職である。
- 4) 戦後、日本経済の高度成長を背景に、企業の日本型経営 (集団主義を基礎に、終身雇用制、

年功序列制、企業内組合、企業内訓練、企業内福利厚生)の経営合理性が指摘されたが、これも、日本資本主義の〈精神〉の「特殊論」の延長にあるといえよう。

- 5) 著者は、ホームレスの国際比較研究という関心から、比較と類型化の方法について論じた(青木2012: 132-133)。その類型化の準則は、資本主義の〈精神〉論にも妥当すると思われる。
- 6) 職人と職工は、労働手段を所有する／しない、代替可能性が大きい／小さい、技術の習得が身体化されている／いない、仕事の自主裁量権がある／ないなどの特徴により区別される(尾高1993: 17-21)。
- 7) 藩の御用職人は、扶持を受け、屋敷地を宛がわれて、提灯や通箱、暖簾には「御用」と大書された(田中1992a: 3)。武具職人は、名字帯刀も許された。明治期に入り、彼らは、このすべてを失った。「帯刀廃止令出ツルヤ、刀剣装飾ノ技工ニ従ヒタル者1朝ニシテ其ノ職ヲ失ヒ、慘状ヲ極メタ」(石川県1919, 『実業功績者事績調』)(田中1992a: 27-28)。
- 8) 弘安がそうであった。(自宅で注文を受け、仕事をする)居職も、工房や問屋に依存し、経営は資本の恣意に左右された。「お金を取りに行けば、そこでまた値切られる。盆と暮におつかいもの(贈答)をし、品物の仕上り近くには『もう仕上りますから、また仕事をお願いします』と頼んだものだった。なんとっていいか、惨めの一語につきた(中略)金沢の商人は『仕事をさせてやる』『生活させてやっている』といったのが職人に対する態度でした」(金沢の蒔絵職人の浅香光甫・清瀬一光の言葉)(田中1992b: 149)。
- 9) ただし職人家族の場合、家父長的な関係は、その仕事の性格(仕事における人格的な自律性や完結性)のゆえに、比較的弱かった。「職人の場合には、農民や商人と異なり、家意識も薄い事も手伝って、仕事上の集団主義も発達しにくかった」(間1987: 163)。そのことは、弘安についても指摘される。
- 10) 町内会は、「保守権力の地域細胞とか、公行政の補充、税外負担の吸上装置」であり、「地縁的な互助的・親睦・祭礼などの私的機能と、地区内の清掃・衛生等の仕事や各級行政に対する強力という公的機能」(奥田1964: 9-10)をもった。町内会は、「典型的旧中間層である業主層(自営業主、中企業主、小企業主)」(奥田1964: 10)により運営された。
- 11) 『米澤弘安日記』には、寺の参詣や行事の記述が頻出する。「今日ハ我家ニ御講ノ宿ヲスル日ダ 朝ハ座敷ノ方ヲ掃除シ、仕事ハ昼迄ニ切上ゲ仕事場ヲ掃除シ皆終リテ後、二時頃散髪ト風呂へ行ク 帰レバ説教最中ナリキ 昼夜二回アリテ、前田孝山氏ト一閑院サント二人ノ説教ニテ、十時頃済ミ後ニ世話焼ト共ニうどん、そばヲ出ス」(明治42年2月23日記)。弘安は、仕事をしながら御詠歌を歌ったりした。(夜、父と僕と芳野の三人にて夜業をなしつゝ、三十三番の御詠歌をあけたり)(大正7年2月22日記)。このように仏教は、弘安の生活の一部であった。とはいえ、仏教の影響が、弘安の生活態度に特段に強かった、あるいは、生活態度を一律に規定したとは思えない。それは、弘安の、西欧的価値を含む諸価値と処世哲学のなかに渾然一体と溶解していた。そこに、歴史の先導役にならなかった日本宗教の一端を見る。

## 【参考文献】

- 阿部謹也1978,『中世を旅する人々——ヨーロッパ庶民生活点描』平凡社.
- 青木秀男2006,「近代民衆における自立の構造——加賀象嵌職人の場合」『社会学評論』日本社会学会 57巻1号 174-189頁.
- 青木秀男2008,「殉国と投企——特攻隊員の必死の構造」『理論と動態』特定非営利活動法人社会学理論・動態研究所 1号 72-90頁.
- 青木秀男2010a,「被差別部落の文化の研究——方法序説」『部落解放研究』広島部落解放研究所 16号 65-84頁.
- 青木秀男2010b,「職人の労働のエートス——象嵌職人の日記から」『ソシオロジ』社会学研究会 54巻3号 55-70頁.
- 青木秀男2012,「ホームレスの国際比較のための方法序説——フィリピン、日本、アメリカを事例として」『理論と動態』特定非営利活動法人社会学理論・動態研究所 5号 128-148頁.
- Bellah, Robert N., 1957, *Tokugawa Religion: The Values of Pre-Industrial Japan*, New York: Free Press. (=1966年『日本近代化と宗教倫理——日本近世宗教論』堀一郎・池田昭訳 未来社).
- 鄭賢淑2000,「自営業層の戦前と戦後」『日本の階層システム I——近代化と社会階層』原純輔編 東京大学出版会 65-87頁.
- 鄭賢淑2002,『日本の自営業層——階層的独自性の形成と変容』東京大学出版会.
- 大門正克2001,「解説・民衆世界への問いかけ」『民衆世界への問いかけ』大門正克・小野沢あかね編 東京堂出版 1-14頁.
- 遠藤元男1985,『職人と生活文化』雄山閣出版.
- 橋本努2000,「社会科学と主体——ウェーバー研究の根本問題」橋本努・橋本直人・矢野善郎編『マックス・ヴェーバーの新世紀——変容する日本社会と認識の転回』未来社 122-139頁.
- 速水融1979,「近世日本の経済発展とIndustrious Revolution」『近代移行期の日本経済』新保博・安場保吉編 日本経済新聞社 3-14頁.
- 間 宏1987,「日本人の仕事意識の歴史」『働くことの意味』三隅二不二編 有斐閣 145-198頁.
- 平山朝治1995,『イエ社会と個人主義——日本型組織原理の再検討』日本経済新聞社.
- Horkheimer, Max und Theodor Adorno, 1947, *Dialektik der Aufklärung: hilosophische Fragmente*, Amsterdam : Querido Verlag. (=2007年『啓蒙の弁証法——哲学的断想』徳永洵訳 岩波書店).
- 色川大吉1991,『民衆史——その一〇〇年』講談社.
- 神島二郎1961,『近代日本の精神構造』岩波書店.
- 鹿野政直1968,「“近代”批判の成立——民衆思想における」『歴史学研究』歴史学研究会 青木書店 341号 46-60頁.
- 川島武宜1957,『イデオロギーとしての家族制度』岩波書店.
- 子安宣邦2003,『日本近代思想批判——1国知の成立』岩波書店.

- 黒崎征佑2005、『日本資本主義の精神——真宗倫理との関連で』文献出版。
- Levi-Strauss, Claude、大橋保夫編1978、『構造・神話・労働——レヴィ・ストロース日本講演集』みすず書房。
- 丸山眞男1946、「超国家主義の論理と心理」『丸山眞男集』3巻 岩波書店 1995年 17-36頁。
- 丸山眞男1948、「日本ファシズムの思想と運動」『丸山眞男集』3巻 岩波書店 1995年 259-322頁。
- 丸山眞男1951、「日本におけるナショナリズム」『丸山眞男集』5巻 岩波書店 1995年 57-78頁。
- 丸山眞男1957、「日本の思想」『丸山眞男集』7巻 岩波書店 1996年 191-244頁。
- 三戸公1994、『「家」としての日本社会』有斐閣。
- 村上泰亮・公文俊平・佐藤誠3郎1979、『文明としてのイエ社会』中央公論社。
- 内藤莞爾1941、(改稿1964)「宗教と経済倫理——浄土真宗と近江商人」『社会学』8輯 日本社会学会年報 243-286頁。
- 中村元1965、『近世日本の批判的精神』春秋社。
- 中村則弘2005、『脱オリエンタリズムと日本における内発的發展——東アジアの視点から』東京経済情報出版。
- 野呂栄太郎・服部之総・羽仁五郎・平野義太郎・山田盛太郎他1932-33、『日本資本主義発達史講座』岩波書店。
- 尾高煌之助1993、『職人の世界・工場の世界』リポレポート。
- 小笠原真1994、『近代化と宗教——マックス・ウェーバーと日本』世界思想社。
- 奥田道大1964、「旧中間層を主体とする都市町内会——その問題点の提示」『社会学評論』日本社会学会 14巻2号 9-14頁。
- 折原浩2005、『ヴェーバー学の未来——「倫理」論文の読解から歴史・社会科学の方法会得へ』精興社。
- Schwentker, Wolfgang, 1998, *Max Weber in Japan: Eine Untersuchung zur Wirkungsgeschichte*, Tübingen: Mohr Siebeck GmbH & Co. KG (=2013年『マックス・ウェーバーの日本——受容史の研究 1905-1995』野口雅弘・鈴木直・細井保・木村裕之訳 みすず書房)。
- 隅谷三喜男1955、『日本賃労働史論——明治前期における労働者階級の形成』東京大学出版会。
- 鈴木鉄心1962、『鈴木正三道人全集』山喜房仏書林。
- 田中喜男1992a、『伝統工芸——職人の世界』雄山閣。
- 田中嘉男1992b、「金沢の職人像」『ホワットイズ・金沢——職人・作家・商人のルーツを探る』黒川威人編 前田印刷株式会社 147-211頁。
- 富永健一1990、『日本の近代化と社会変動——テュービンゲン講義』講談社。
- 戸谷敏之1948、「中斎の『太虚』について——思想」『日本農業経済史研究』上巻 小野武夫博士還暦記念論文集刊行会編 日本評論社 139-174頁。
- 内田芳明1968、『ヴェーバー社会学の基礎研究』岩波書店。
- Weber, Max, 1920, *Die Protestantische Ethik und Der Geist Des Kapitalismus* (=2010年『プロテスタント主義の倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳 岩波書店)。

- Weber, Max, 1921a, “Konfuzianismus und Taoismus,” in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. (=1971年『儒教と道教』木全徳雄訳 創文社).
- Weber, Max, 1921b, “Hinduismus und Buddhismus,” in *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. (=1983年『ヒンドゥー教と仏教』深沢宏訳 日貿出版社).
- 山本七平1979, 『日本資本主義の精神——なぜ、一生懸命働くのか』光文社.
- 山崎正和1990, 『日本文化と個人主義』中央公論社.
- 安丸良夫1974, 『日本の近代化と民衆思想』青木書店.
- 米澤弘安日記編纂委員会編『米澤弘安日記』上巻(2001年) 中巻(2002年) 下巻(2000年) 別巻(2003年) 金沢市教育委員会.
- 寿里茂1961, 「社会運動の心理と論理」『早稲田商学』早稲田商学同好会 150号 47-79頁.
- 寿里茂1962, 「日本の旧中間層——その社会的性格」『早稲田商学』早稲田商学同好会 164-165号 69-92頁.

(あおき・ひでお 広島部落解放研究所)